

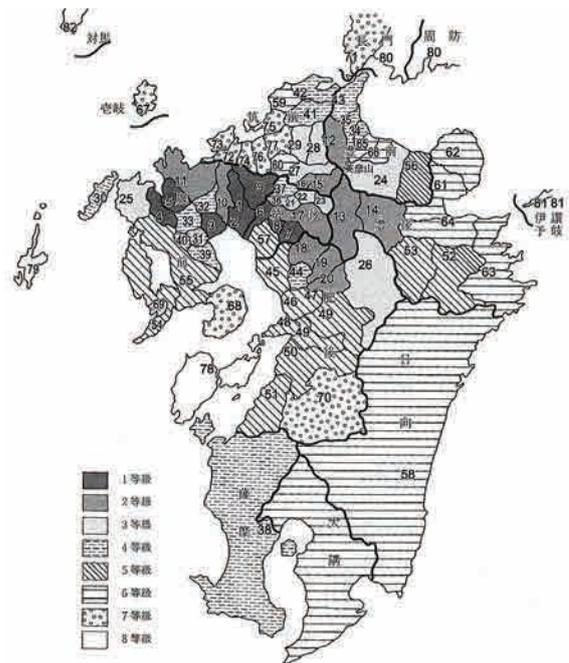
## 5. 英彦山権現講をはじめとする英彦山詣でにみる歴史的風致

### (1) はじめに

英彦山権現講とは、英彦山を信仰している人々が成した社会組織であり、彦山講や権現講などとも呼ばれている。この英彦山権現講は、毎年または数年に一度、代表者により英彦山を参詣することが習わしとなっている。現在でも、英彦山の六助旅館（現、鷹巣高原ホテル）の宿泊台帳をみると、佐賀県神埼地域から「権現講」として継続的に英彦山を参詣していることがわかる。

英彦山権現講は、九州一円に広がっているため、さまざまな英彦山権現講が存在している。地域ごとの檀那数などから示された『檀方帳』（江戸時代）によると、英彦山信仰が九州一円に広がっていることがわかるとともに、佐賀県や長崎県において信仰が篤かったことが示されている。

英彦山山伏は檀那廻りに際して、布施の量や質、距離と所要時間などを総合し、最も高収益・高能率の地域を第一等級として、等級差があり、等級が高い地区を中心に、現在まで英彦山権現講による英彦山詣でが続いている。そして、霊峰英彦山にはそれ以外にも多くの登山客が訪れ、山開きや行楽シーズンには賑わいをみせている。



英彦山信仰圏（檀那場）の等級差

- |      |        |        |        |       |          |
|------|--------|--------|--------|-------|----------|
| 第1等級 | 1 上佐賀  | 2 佐賀城下 | 3 白石   | 4 有田  | 5 伊万里    |
|      | 6 三潞   | 7 上妻   | 8 下妻   | 9 田代  |          |
| 第2等級 | 10 小城  | 11 唐津  | 12 田川  | 13 日田 | 14 玖珠    |
|      | 15 上座  | 16 下座  | 17 神代  | 18 山鹿 | 19 菊池    |
| 第3等級 | 20 合志  | 21 山本  | 22 竹野  | 23 生葉 | 24 下毛    |
|      | 25 平戸  | 26 阿蘇  | 27 夜須  | 28 嘉麻 | 29 穂波    |
| 第4等級 | 30 平戸嶋 | 31 鹿島  | 32 多久  | 33 武雄 | 34 仲津    |
|      | 35 京都  | 36 御井  | 37 御原  | 38 薩摩 | 39 塩田    |
|      | 40 嬉野  | 41 鞍手  | 42 遠賀  | 43 企救 | 44 肥後山本  |
| 第5等級 | 45 玉名  | 46 飽田  | 47 詫摩  | 48 宇土 | 49 上・下益城 |
|      | 50 八代  | 51 芦北  | 52 大野  | 53 直入 | 54 深堀    |
|      | 55 諫早  | 56 宇佐  | 57 旧柳河 |       |          |
| 第6等級 | 58 宮崎県 | 59 宗像  | 60 御笠  | 61 速見 | 62 国東    |
|      | 63 海部  | 64 大分  | 65 築城  | 66 上毛 |          |
| 第7等級 | 67 壱岐  | 68 嶋原  | 69 長崎  | 70 求麻 | 71 豊浦    |
|      | 72 怡土  | 73 志摩  | 74 早良  | 75 糟屋 | 76 那珂    |
|      | 77 蓆田  | 78 天草  | 79 五島  | 80 防長 | 81 伊豫・讃岐 |
| 第8等級 | 82 対馬  |        |        |       |          |

図 英彦山信仰圏（檀那場）の等級差  
【出典：長野覺『英彦山修験道の歴史地理学的研究』（昭和62年（1987））】

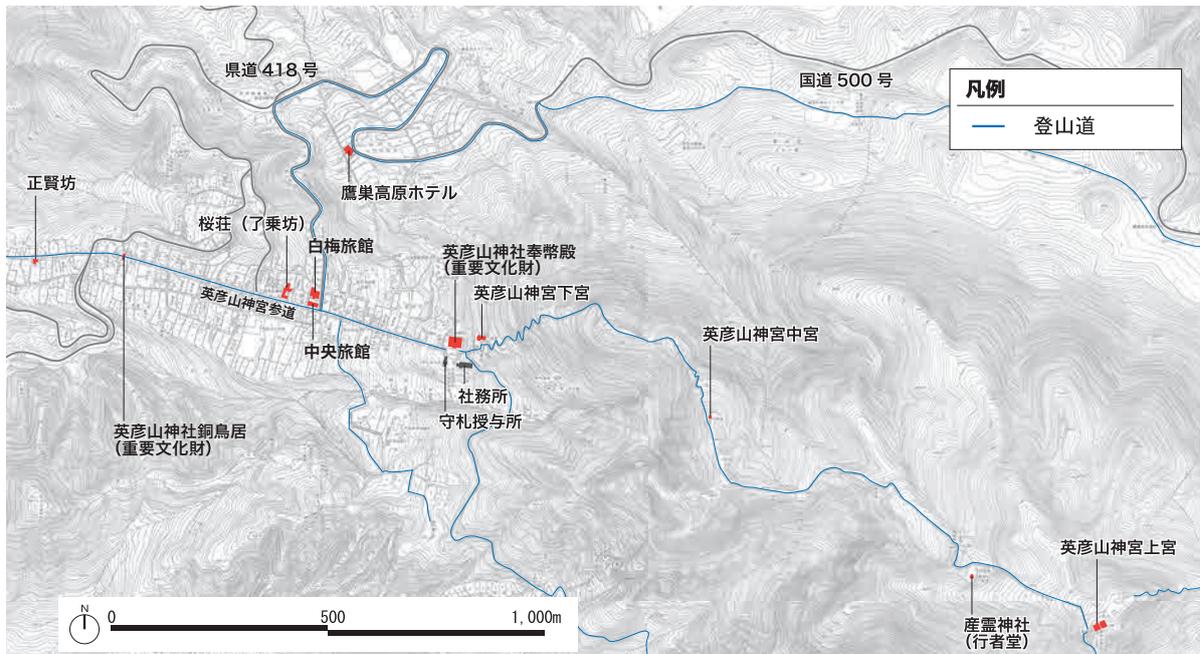


図 権現講の英彦山詣でに係る建造物

## (2) 歴史的風致を形成する建造物

### 1) 正賢坊

正賢坊は、英彦山神社銅鳥居より約 200m ほど下った地点の南側に位置し、英彦山門前西限にある。日田道～雲母坂～唐ヶ谷に入って次手坂を過ぎると正賢坊に出ていた。坊の建築物としては小規模で鍵屋造、茅葺鉄板被・矩折れで客殿部分は二階建になっている。現在は、道路際から直接茶の間脇の玄関に入るが、当初は、客殿の下手から屋敷内に入り奥まで通って左に 2 回折れて式台前に着くようになっていた。

建立年代は、『英彦山伝統的建造物群保存地区調査報告書』(昭和 53 年 (1978)) によると、天保 11 年 (1840) ととも安政年間頃 (1854 ~ 1860) とも伝えるが、見た目はもう少し新しく、慶応年間頃 (1865 ~ 1868) とされる。他の宿坊に比べ祭壇の位置など異なるところが多く、小規模ながら珍しい例といわれている。



正賢坊

### 2) 了乗坊

了乗坊は、坊家で昭和初期から「桜荘」を営んでいた。木造二階建てでセメント瓦葺とトタン葺の棟からなり、町の資料によると、トタン葺の棟の建築年は大正 11 年 (1922) 築となっている。従来多くの権現講の泊まり客があったことが知られ、昭和 19 ~ 21 年 (1944 ~ 1946) の『宿泊人名簿』には英彦山詣でに訪れる英彦山権現講代表者の住所、氏名、年齢、職業、宿泊目的、前夜宿泊地、到着日時、出発日時が細かく記されている。



了乗坊

### 3) 中央旅館

中央旅館は、英彦山神宮参道に面し、花山旅館の西側に建つ、入母屋造・金属葺・三階建（一部二階建）の建物である。町の資料によると、明治44年（1911）に建てられたもので、かつては旅館として利用されていた。



中央旅館

### 4) 白梅旅館

白梅旅館は、英彦山神宮参道からみて中央旅館の裏手に建つ、入母屋造・瓦葺・一部二階建の建物である。町の資料によると、大正8年（1919）に建てられたもので、かつては旅館として利用されていた。



白梅旅館

### 5) 英彦山神宮上宮

英彦山神宮上宮は、英彦山中岳の山頂に鎮座する英彦山神宮の御本宮である。祭神は天忍骨尊である。『稿本英彦山神社誌』（昭和19年（1944））によると、明徳3年（1392）の火災以来、数回の火災に遭って焼失し、現在の社殿は、棟札から天保13年（1842）から弘化2年（1845）の間に、佐賀藩主鍋島齊正の寄進によるものとされる。

標高約1199mの山頂に鎮座している社殿のため、人力による建築材料の搬送や、雨量が多い状況下での木造建築の保存は容易でなかったと思われる。



英彦山神宮上宮

現在の建築物は霧除けにより覆われている。宝殿は桁行5間、梁間4間、入母屋造、銅板瓦棒葺、向拝3間、総檜造の白無垢社殿で、御殿の板戸には鍋島家の抱茗荷家紋が掲げられ、木鼻、蟬股などクス材の細密彫刻が施される。拝殿は桁行5間、梁間4間、入母屋造、銅板瓦棒葺、向拝1間で、神饌所付である。幣殿はなく、宝殿、拝殿の間は石畳となっている。二十数坪の小規模な建築物であるものの、英彦山を代表する社殿建築の一つといえる。

表 そのほかの歴史的風致を構成する建造物（他の歴史的風致において概要を記載）

	建造物名	掲載ページ
1	英彦山神宮奉幣殿	2-5
2	英彦山神宮銅鳥居	2-11
3	英彦山神宮参道	2-12
4	英彦山神宮下宮	2-20

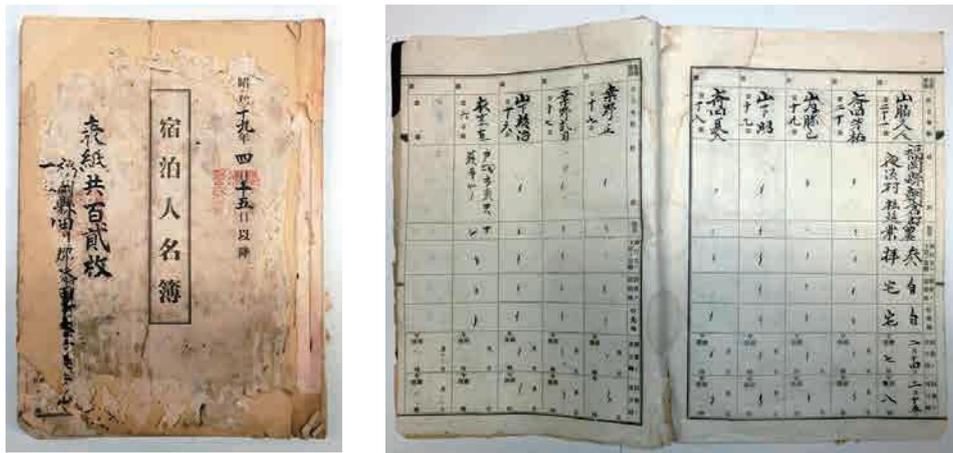
### （3）歴史的風致を形成する活動

#### 1）英彦山詣でと英彦山権現講

##### ①英彦山詣でと英彦山権現講の歴史

『川副町史』<sup>かわそえちよし</sup>（昭和54年（1979）、旧川副町は現、佐賀市）によると、江戸時代から「権現講」として英彦山に参詣していたことが記されている。また、「ヒコサンミヤーイに行く」と言っ  
て、3月15日の御田祭頃に参詣していたことが明治35年（1902）の旧川副町堂面東組の  
『権現講帳簿』<sup>ごんげんこうちゅうぼ</sup>に見られる。

昭和19～21年（1944～1946）の了乗坊（桜荘）の『宿泊人名簿』には、参拝者の住所、氏名、年齢、職業、宿泊目的、前夜宿泊地、到着日時、出発日時と細かく記されている。戦時中であつたため、この表紙には「福岡県添田警察署」の印があり、中にも押印されていることから定期的に検閲を受けていたことがわかる。この宿泊帳をみると、昭和19年（1944）10月5日に佐賀県小城郡三日月村（現、小城市）、福岡県三潴郡、佐賀県神埼郡からの権現講と見られる3、4名の小規模3団体の宿泊客があり、これは英彦山秋大祭の日にあたる。また、終戦直後の昭和21年（1946）2月14日に福岡県朝倉郡夜須村（現、筑前町）からの16歳～24歳までの男子12名が宿泊している。この日は古来英彦山松会の日にあたり、16～18歳の青年と、初参りの者により権現講の代参が行われたことがわかる。当日は午後7時に到着、翌日は午前8時に出発している。このような代参は、戦時中は一時中断されたが、戦後直ぐに権現講が復活した。



英彦山桜荘宿泊人名簿（昭和19年（1944）4月15日～昭和21年（1946）3月30日）

かつては英彦山詣でのため、多くの参詣者は筑前、豊前、筑後から郡境・国境の峠を越え、英彦山に到達した。その経路は、門前から延びる津野七ツ石、雲母坂、日田道などの古道が九州自然歩道として整備され、現在では多くの登山者が訪れている。また、動線上には旧数山家住宅（重要文化財）、野田宮田家などの従来「草鞋替え」であった場所がある。



雲母坂



旧数山家住宅（重要文化財）

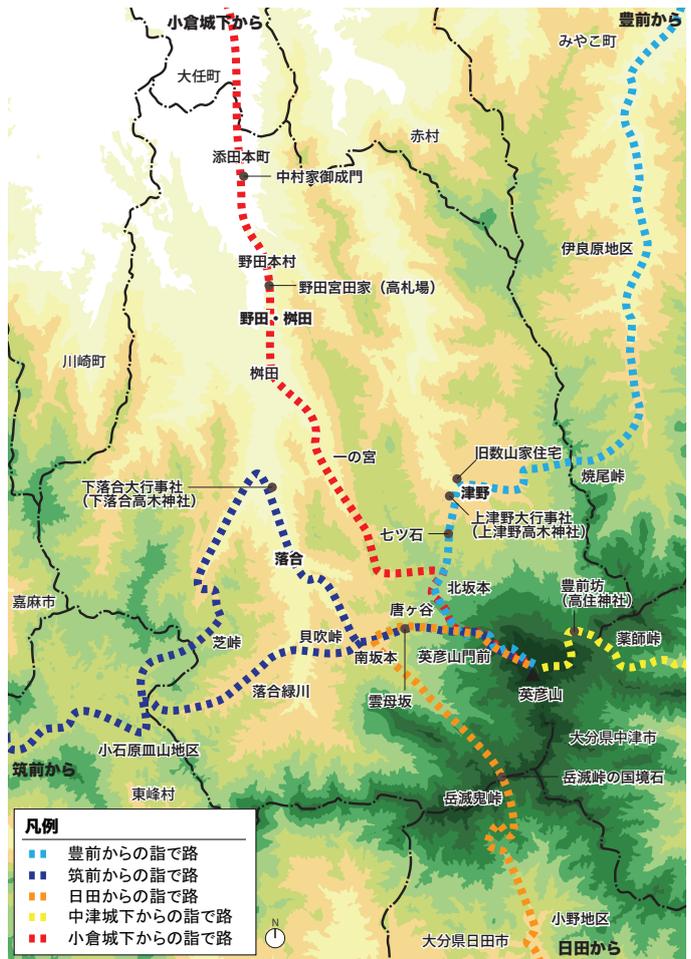


図 英彦山詣での参詣路

## ②英彦山権現講ごとの英彦山詣での例

ここでは、九州一円に広がる英彦山権現講の中から代表的な地区について解説する。

英彦山信仰圏の等級差が第1等級であった佐賀県神埼地区では、現在も盛大に彦山権現講の祭りが行われている。佐賀県『千代田町誌』(昭和49年(1974))及び『神崎市史』(令和4年(2022))によると、神崎市千代田町大島地区では江戸時代中期から、毎年2月第2日曜日にクリークに掛かる橋で、若衆30名余りが橋の双方に分かれて水をかけ合う「ミズカカイ」とよぶ「水かけ祭り」を行っている。この祭りの1ヶ月後の3月、「権現講」として代表者による英彦山詣でが行われている。この大島地区から権現講代参に来る坊家は「正賢坊」で、御当主正木氏によると3月15日の御田祭、または4月の神幸祭の折に権現講として参詣しているという。昔は宿坊に宿泊していたが、現在は坊に詣ると直ぐに英彦山神宮へと参詣し、その日の内に帰路につくという。



佐賀県神崎市千代田町大島の権現講(水かけ祭り)



権現講の直会の様子(水かけ祭り)

『西日本新聞 2013年7月17日版』によると、佐賀県小城市の農家集落からも毎年英彦山を参詣していることが示されている。小城市の農家集落では、講が行われており、毎年30軒近くある集落の中でくじ引きが行われ、当たった数軒が英彦山参詣に参加するという。現在の英彦山への参詣は、自動車で行われている。この参詣者の習わしとして、英彦山神宮銅鳥居で参拝した後に鷹巣高原ホテルに行き、お昼にコイやヤマメの魚料理などを食べた後、山頂に登って英彦山神宮中宮や英彦山神宮上宮を参拝することとなっている。鷹巣高原ホテルは、参道筋の花山旅館の東側に隣接してあった六助旅館の別館として昭和34年(1959)に建てられた。現在、英彦山地区で数少ない宿泊施設で、権現講の代参宿泊もここで行われている。



鷹巣高原ホテル



おひら

夜は、昆布やかまぼこ、タケノコ、鯛を使った伝統料理「おひら」を味わいながら宴会に興じる。支払いは、「宿泊代」ではなく、「包み銭」として相応の金を渡しており、往時のお布施の名残を留めている。この際、英彦山神宮のお札としゃもじを集落の戸数分、土産として渡し、日本酒2升と前日の夕食の残りをつめたお弁当を渡すという。

佐賀県神埼市猪面地区の英彦山権現講の代参者は、英彦山神宮銅鳥居から英彦山神宮境内を目指し、奉幣殿での参拝を済ませると、一路御本殿の上宮を目指す。途中、下宮、中宮、行者堂に参拝する。上宮参拝を済ませると、再び奉幣殿へと参拝し、そこで御札や英彦山がらを権現講社員のために授かって帰路につく。

地区に戻ると、当年の施主からの英彦山に代参した報告と御神酒開きをかけて権現講が行われ、次年の施主決めのためのくじ引きも行われる

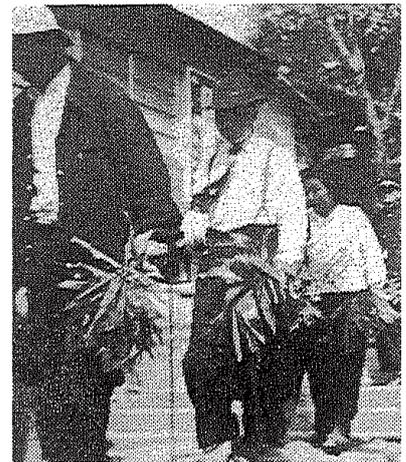
福岡県南部や佐賀県からの代参のほか、大分県日田地方でも毎年春に代参者を立て、英彦山神社の春の「御田祭」に参詣している。英彦山から帰路につくとき、参詣者は講中への土産として、神札や英彦山がらを授与所で求めて帰ることが習わしである。英彦山がらからは、現在、参道沿いの土産でも求めることができる。権現講では、英彦山の特産品であったしゃもじを買いたい、帰路それを打ち鳴らしながら帰ると、村内ではサカ迎えが行われた。



佐賀県神埼市猪面地区の英彦山権現講の様子（平成23年（2011）、神埼市提供）  
上座にいる4名が当年の施主

また、上宮の熊笹を持ち帰り、整腸薬として煎じて飲んだり、牛馬の守りとして食べさせたという風習もかつてあった。

「英彦山詣で」は「半参宮」といわれ、2度参詣すれば「伊勢参り」したのと同じ御利益があるとされた。このような参詣は昭和前半までであったという。



熊笹を持ち帰る参詣者  
(昭和31年(1956))

たかの すやま がくめ きさん  
周辺の鷹ノ巣山、岳滅鬼山ま

### ③現在の英彦山詣で

現在の英彦山詣では3月15日の御田祭、4月第2土・日曜の神幸祭、5月下旬の英彦山山開きにおいて権現講代参が行われている。そして、英彦山詣では権現講代参以外にも、登山としての楽しみを兼ねた形で多くの参詣者が訪れる。英彦山周辺には登山道が整備されており、中には最寄り駅である彦山駅から参道や英彦山神宮上宮までを巡る人や、

周辺の鷹ノ巣山、岳滅鬼山まで登山として巡る人も見られる。特に、山開きや秋の紅葉の時期にはリュックを担いだ人々が、雄大な自然の中で、英彦山の歴史に思いをはせながら英彦山詣でを楽しんでいる様子がみられる。



山開きでの上宮参詣の様子①



山開きでの上宮参詣の様子②



参道を登る参詣客①



参道を登る参詣客②



紅葉の英彦山庭園



登山道の様子

#### (4) まとめ

英彦山権現講は、「十方檀那<sup>じっぼうだんな</sup>」と称された信者が英彦山参りのために各村々で作った信仰組織のことで、九州一円 42 万軒にも達し、毎年、九州の各地域にある英彦山権現講の代表者が参詣する「英彦山詣で」が脈々と受け継がれている。英彦山権現講の参詣は、英彦山参詣路を通して英彦山神宮を参拝するもので、時代の移ろいの中で参詣する様相は変化しているものの、英彦山を参詣する光景から英彦山信仰を感じ取ることができ、歴史的風致が形成されている。

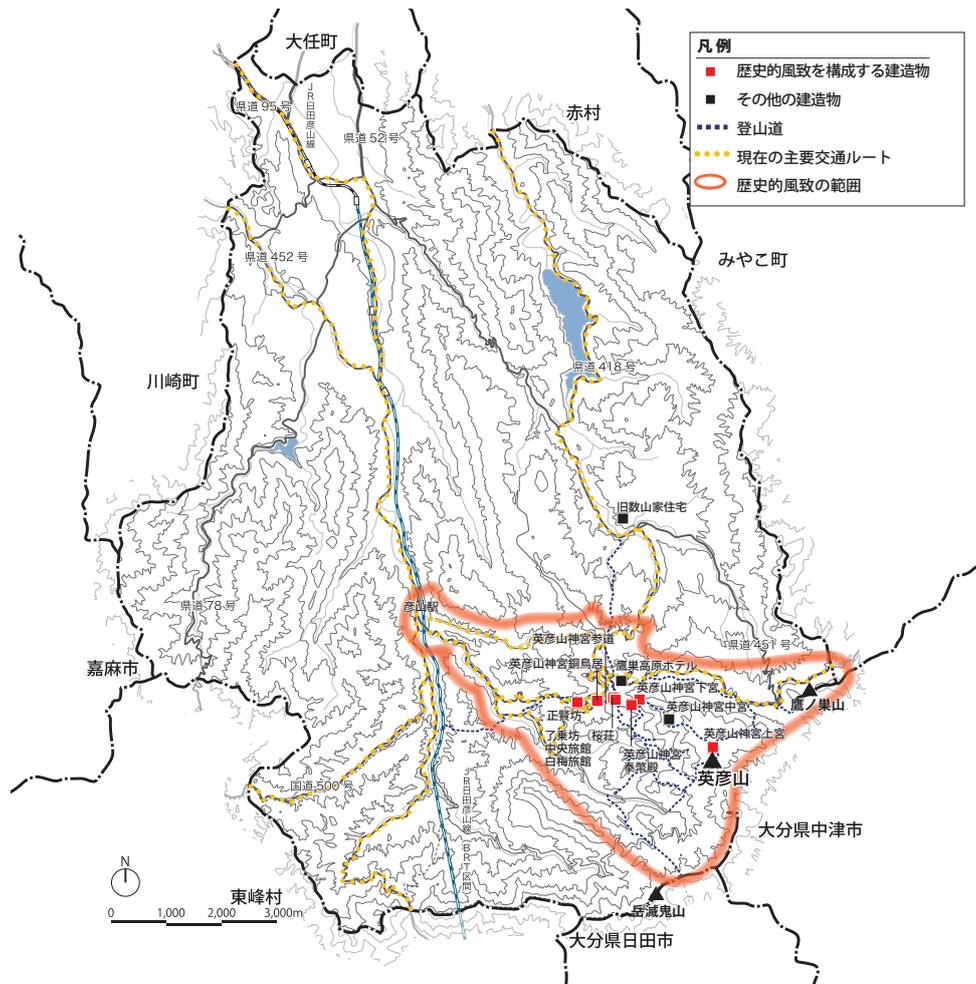


図 英彦山詣でと英彦山権現講にみる歴史的風致の範囲

### コラム3 英彦山詣でと英彦山がらがら

#### ■英彦山がらがらの製作

英彦山がらがらは、約800年の歴史を持つ土鈴のことで、お守りとして親しまれている物である。

英彦山がらがらの製作は、英彦山の麓に位置する緑や水が豊かな落合集落おちあいの窯元で現在も行われている。

その製作方法は、福岡県産のきめの細かい粘土を使って、「かえ玉」とよばれる丸い玉を包むような形で粘土を丸め、竹べらで切れ込みを入れて鈴口を作る。鈴口からかえ玉を取出し、鳴子となる粘土を素焼きした小さな玉を入れ、直径2cm程度の土鈴の原型を作る。窯元ではこの行程を一つの土鈴につき十数秒で行い、昔は一日に1,000個以上を作ったが、現在は600個程を作っている。土鈴は乾燥後にまとまった数になると、薪釜で素焼きされる。この際、窯で焼く温度が高すぎると甲高い金属音のような音色になってしまうので、素焼きならではの素朴な音色になるよう調整される。その後、水を表す青色と太陽を表す赤色を鈴口に彩色し、稲わらで5個ずつ束ねて一つの英彦山がらがらが完成する。製作のピークは、参詣者が多くなる年末年始から春を迎える前の、秋から12月頃にかけてで、多くの土鈴を製作し、英彦山神宮までの道のりを運んでいる。

英彦山がらがらの特徴は、一つ一つ時間をかけて手作りされているため、音色が一つ一つ異なり、素朴な趣が感じられるところにある。

#### ■参詣者への英彦山がらがらの授与

製作された英彦山がらがらは、英彦山神宮でお祓いを受けた後、お守りとして授与所で参詣者に授与される。また、英彦山の参道の店舗でも英彦山がらがらを買求めることができる。

以前は、参詣者が英彦山がらがらを腰に下げて持ち帰るといった光景が、小粋な英彦山情緒として親しまれていた。参道を下る際に揺れて「カラカラ」と奏でる、その温もりのある音色は、素焼きならではの素朴な音色で、英彦山での風物詩であった。今も「英彦山詣で」の記念として、多くの参詣者が持ち帰っている。



一つ一つ手作りの英彦山がらがら



英彦山がらがら



英彦山がらがらの窯元



英彦山神宮で授与される英彦山がらがら